

質問

中学一年になる長男の子ですが、小学校低学年のころから「授業中に寝てしまう」「宿題をしない」「同級生でけんかをする」など、学校から注意されることがしばしばありました。性格の問題かと思っていますが、病院で診てもらった結果、発達障害の一つ「注意欠陥多動性障害(ADHD)」と分かりました。服薬を続けて、性格も穏やかになっていますが、今後、問題行動を起すまいとしないよう最善を尽くしたいのですが、アドバイスをお願いします。

授業中寝る宿題をしない…



答え

治療薬の服用によつて、行動の改善がみられたことは一安心です。本人にとっては、注意されるのが少なくなり、学校生活を楽しく送れるようになったのではないかと見えます。これから、子どもの成長を見守っていくわけですが、一番の心配は、将来、職業を身に付けて社会に適應できるかどうかになるかと、この辺りには注意が必要です。学校生活では、教師・友人とのコミュニケーションや、クラブ活動などの先輩・後輩との付き合いを通して対人

注意欠陥多動性障害



二宮恒夫客員教授

關係を築きます。学年が上がるとつれて新しい知識を習得し、社会に適應する力を身に付けていくこととなります。日々変化に富む学校生活は、まさに社会適應に向けた練習

徳島大学医学部保健学科 (徳島市蔵本町3)

の期間です。社会適應への力の源は自信です。自分が得意なのは、ただ思いつくに出会えば、その得意なものを生かす職業に就くことであるようにあります。子どもにとっての学校生活は、自分の潜在能力に気が

質問募集

読者の健康に関する悩み、県内の専門医がお答えします。病名、体調不良などの症状を詳しく書き、住所、氏名、年齢、性別、職業、電話番号を明記し、〒770-8572 徳島新聞社文化部「健康相談」係へ。紙上に住所、氏名、電話番号は掲載しません。

自信つけるよう手助けを

き、自信をつける場でもあります。子どもが自信をつけるように手助けすることが、周囲の大人たち、特に親の務めではないかと思えます。

これまでは、命令的な指示で子どもの行動を矯正しようとしたことが多かったと思えます。これだと子どもは自尊心を傷つけられ、自信の低下につながっていったでしょう。子どもの行動が落ちつき、自尊心が傷つけられる機会が少なくなったとはいえ、これ

からも、周囲の人たちには理解の困難な出来事は起ると思えます。同じ小さな失敗が繰り返されるかもしれない。それだけに立派なことを覚え、つい子どもに自信を失わせる言葉を掛けることがあるかもしれません。

しかし、子どもに自信を「が、大切な対応の基本です。子どもが社会に出るまでは、まだ時間があります。無らさず、ゆっゆと、このように声を掛けたいのは子どもに自信が生まれるのかを考えると、子どもが良い点を強調

調し、得意なところを継続して取り組む気持ちを持ってさせる言葉が良いでしょう。そのためには、子どもの日々の学習姿勢や行動をきちんと知ることが大切です。折に触れ教師と連絡を取り、学校での様子を聞きながら、子どもへの対応を教師とともに整理しておきましょう。

今はインターネットの時代です。ADHDの特徴や、対応、そして治療に関する教科書的な情報は入手しやすくなっています。しかし、これらの情報は参考としかなりません。子どもへの言葉や対応は、目の前の子どもに適切なものでなければなりません。「子どもから学ぶ」が、二つ目の大切な対応の基本です。

薬物治療としては、「リリサータ」が服用されていると思えます。本剤の適応年齢は6～18歳ですが、18歳以上になっても治療上の有益性と安全性が確保されれば、慎重に投与を続けることができるようになります。

親、教師、そして信頼のおける専門家(臨床心理士、医師)が、子どもを田の中心に置いて、それぞれの専門の立場から子どもを知り、子どもの将来のために話すべきことを話し合っていくべきでしょう。